

2019年度～2022年度

学校教育総合プラン評価シート(学校自己評価)

逗子市立

逗子中学校

学校教育総合プラン実施計画・評価一覧 2019(平成31)～2022()年度

【 逗子市立逗子中学校 】

項目	4年間を見据えた取組内容 (できるだけ具体的な内容で記載する)	項目別評価				総合評価							
		2019年度	重点目標	2020年度	重点目標	2021年度	重点目標	2022年度	重点目標	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
教育環境の充実	① 学校安全の推進	事故防止会議での事例などを参考に学校事故を起こさないようにする。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	B	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	69%	63%	75%
	② 教育情報化の推進	校務支援システムを利用し、生徒と向き合う時間を増やすようにする。	A	<input type="checkbox"/>	B	<input type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	③ 地域との協働推進	学校評議員への定期的な情報の提供を実施する。	A	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	④ 学校評価を生かした学校づくり	学校評価を学校経営に反映させてよりよい教育活動を実施させる。	B	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
柱Ⅰ 学習指導の充実	① 授業改善の推進	学びにくさを持つ生徒への支援を充実させる。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	75%	69%	75%
	② 健康体力づくりの推進	食事、運動、休養、睡眠を意識させた活動をおこなう	A	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	③ 体験活動の充実	生徒会活動を活性化させ、生徒相互の思いやりの気持ちを醸成する	A	<input type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	④ 今日的課題への取組	情報モラルの育成を図るために外部講師による授業を実施する。	A	<input type="checkbox"/>	B	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
柱Ⅱ 支援の充実	① 支援環境の充実	教育相談体制を広く生徒・保護者に周知を図るとともに、機能する支援体制を確立する。	A	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	69%	69%	69%
	② 女心じさる居場所づくりと絆づくりの推進	生徒同士が互いに認め・助け合う集団づくりをおこなう。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	③ 問題行動対策・不登校対策の推進	生徒の変化を「気づくこと」「見逃さないこと」から情報の共有を図る。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	④ 幼・保・小、小・中の連携の推進	行事を通して小学生が中学校に足を運ぶ機会を多く作る。	B	<input type="checkbox"/>	B	<input type="checkbox"/>	B	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
柱Ⅲ 学校組織の充実	① 学校・学年・学級経営の充実	教職員の学校経営・運営に対する参画意識の向上を図る。	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>	69%	75%	75%
	② 研究・研修の充実	研修・研究会・担当者会等へ積極的に参加するよう、教職員の意識を啓発する。	A	<input type="checkbox"/>	S	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	③ 信頼に基づいた指導の推進	生徒指導担当を中心に生徒の共通理解を図る	B	<input type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>	A	<input checked="" type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			
	④ 働き方改革の推進	教師同士の持続可能な教育活動・向上のための人材の育成をOJT中心に進める。	A	<input type="checkbox"/>	B	<input type="checkbox"/>	A	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>			

％は、Sを5、Aを4、Bを3、Cを2とし、計算した数値

評価基準 S・・・想定以上の顕著な成果が見られた(100%～91%程度) A・・・想定していた成果が見られた(90%～71%程度)
B・・・一定の成果が見られた(70%～31%程度) C・・・成果が見られなかった(30%～0%程度)

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【 逗子市立逗子中学校 】

教育環境の充実

4年間を見据えた取組内容

教育情報化の推進

2019年(平成31年)度

2020年(令和2年)度

2021年(令和3年)度

2022年(令和4年)度

期首入力	学校の 実態と課 題	校務支援システムやグループウェアなどのシステムは導入されているが、働き方改革を推進する上では、十分な利用が進んでいるとはいえない状況である。グループウェアを利用した、打ち合わせの短縮や校務支援システムを利用しての帳票や評価などシステムを十分使っていくことが課題である。	今年度は一つのスキルアップだけだったが、次年度は前に学んだこと以外もできるようになってもらいたい。	・全職員のスキルアップのために伝達講習を実施する。 ・新しく配備された学習端末の運用上の整備と、授業での活用方法等については引き続き取り組むべき課題である。 ・評価方法が変わることによる校務支援システムでの成績処理については全教員で方法を理解し進める必要がある。	・Chromebookについては、引き続き運用上のルール等の整備が必要である。 ・校務支援システムを活用した指導と評価の一体化については、引き続き学校全体で取り組んでいきたい。 ・HPは次年度中にリニューアルに向けた取り組みがあるとのことなので、それに合わせ、活用できる人員を増やしていく。	
	↓	↓	↓	↓	↓	
	年度目 標	教育情報化をさらにすすめ、学校の情報を積極的に発信することを進めていく。	教育情報化を前年度よりも進め、学校の情報を積極的に発信する	教育情報化を更に推し進め、学校の情報を積極的に発信する		
	↓	↓	↓	↓	↓	↓
期末入力	取組計 画	・グループウェアをさらに利用していく。 ・ホームページは全員がアップロードできるようにする。 ・アンケートは電子化をすすめ、アンケートを採った直後に集計できるようにする。	・ホームページにアップロードできる職員を増やす。 ・メール配信を充実させる。 ・and.Tのアンケート機能を活用して職員の反省、振り返りを行う。 ・グループウェアをさらに活用する。 ・校務支援システムを事務作業の短縮に活用する。	・ICT特別委員会を発足させ、学習端末運用上の課題を整理する。 ・ホームページ、メール配信、アンケート集計についての伝達講習を行い、職員のスキルアップを図る。 ・and.Tのアンケート機能等、前年度までに実施してきたことを継続する。 ・新たな評価方法の研修と合わせて、校務支援システムを活用した指導と評価のカリキュラムマネジメントを浸透させる。		
	↓	↓	↓	↓	↓	
	実践した 内容	学校事務チームをたちあげ、アンケート集計 ホームページ メール配信の3つについてどれかをできるようなスキルを身につけるよう研修会を実施した。行事等の反省やふりかえりはグループウェアを積極的に利用し、担当者が入力することをやめ、コピーとはりつけですませるようにした。保護者などへはQRコードを利用したものを利用して、保護者等からの意見の集約をするようにした。	・年度初めに本校の教育に関わる必要書類を一斉配付資料として冊子の形で保護者に配付した。 ・休校中にはメール配信とHPの活用で生徒や家庭に情報を発信した。 ・職員の振り返りや意見集約はand.Tのアンケート機能を活用することとした。 ・校務支援システムの成績処理等における活用方法を全体で確認し、事務処理の時短を組織として行った。	・ICT特別委員会が学習端末運用上のルールを定めた。 ・前年度に引き続きand.Tのアンケート機能を活用した。 ・保護者に向けて、メール配信での情報の発信を行った。 ・説明会や懇談会をリモート併用で行うことができた。 ・校務支援システムを活用し、各教科で評価と指導の一体化について研究しつつ、新しい評価方法に取り組んだ。		
	↓	↓	↓	↓	↓	
期首入力	達成度 評価	A	B	A		
	↓	↓	↓	↓	↓	
	評価の 根拠	行事等のふりかえりについては紙で配付することがなくなっている。アンケート集計もSQSのシステムを利用することで、簡単に集計までできるようになった。また、ホームページも担当者が伝達講習を実施することができている。	・職員の行事等の振り返りは全てand.Tのアンケート機能を活用した。 ・感染症対策で予定の変更が度々発生したが、意見集約はand.Tのアンケート機能で行い、情報伝達はメールやお知らせに掲載することで省力化できた。 ・学校事務チームが十分に機能したとはいえない。伝達講習を実施できなかった。 ・1月に配備された学習端末については、授業ですぐに活用すべく対応している。	・ICT特別委員会が運用上の問題に迅速に対応し、生徒及び職員のChromebook活用促進につながった。また、Chromebookを活用していく中で見えてきた課題を整理し、活用の幅を広げられるよう調整役として機能した。 ・全体としての伝達講習会は実施できなかったが、担当者同士での情報伝達が有り、結果としてスキルアップとなった。 ・新しい三観点での評価に加え、道徳の授業の評価についても校務支援システムの活用を進めることができた。		
	↓	↓	↓	↓	↓	
期末入力	学校の 実態を踏 まえた課 題	今年度は一つのスキルアップだけだったが、次年度は前に学んだこと以外もできるようになってもらいたい。	・全職員のスキルアップのために伝達講習を実施する。 ・新しく配備された学習端末の運用上の整備と、授業での活用方法等については引き続き取り組むべき課題である。 ・評価方法が変わることによる校務支援システムでの成績処理については全教員で方法を理解し進める必要がある。	・Chromebookについては、引き続き運用上のルール等の整備が必要である。 ・校務支援システムを活用した指導と評価の一体化については、引き続き学校全体で取り組んでいきたい。 ・HPは次年度中にリニューアルに向けた取り組みがあるとのことなので、それに合わせ、活用できる人員を増やしていく。		
	↓	↓	↓	↓	↓	

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【 逗子市立逗子中学校 】

柱 I	学習指導の充実	4年間を見据えた取組内容	授業改善の推進
------------	----------------	---------------------	----------------

2019年(平成31年)度	2020年(令和2年)度	2021年(令和3年)度	2022年(令和4年)度
----------------------	---------------------	---------------------	---------------------

期首入力	学校の実態と課題	新しい学習指導要領が発表され、移行措置も始まっている。この中で、「主体的対話的で深い学び」の実現にはなかなか近づいてはいない。先生方が研修や研究を深め、新しい学習指導要領の理念にかなった授業を展開できるようにすることが課題である。	新しい学習指導要領を見据えた年間指導計画や学びのプランを作成する。校務支援システムをさらに利用していく 道徳については全員で授業を行う体制を続けていく	・新しい学習指導要領に基づいた年間計画、学習情報、まなびのプランの作成をすともとに道徳の項目との関連を確認する必要がある。 ・授業改善に役立てる評価について、更に研修する。 ・道徳についても、授業改善とそれに役立てる評価、生徒を伸ばす評価について研修と検討を行う。	・生徒の関心を引きつける魅力ある授業づくりという視点の強化が必要である。 ・主体的な学習がより深い学びにつながるよう改善は続けていく。 ・道徳の授業では、授業者が固定されていないので、授業による一人ひとりの気持ちの変容を迎える資料の作成が必要かと思われる。
	↓	↓	↓	↓	
	年度目標	授業改善の推進	新学習指導要領の目指すところの資質・能力を育成するための授業づくりの推進	学びに向かう力を育成する授業づくり、及び、指導と評価の一体化	
期末入力	取組計画	・年間指導計画 学びのプランにより生徒の学びにくさを解消する。 ・授業力の向上により、教師の成長に努める。 ・発表活動を取り入れた授業を実践する。 ・指導事項・指導内容に応じた適切な教材の開発や指導法の改善に努める。 ・教科ごと「学びにくさの改善」に適切な課題を利用する。 ・教科会の充実を図る。 ・道徳の評価について研修を深め取り組む	・新しい学習指導要領で求められる授業およびその評価についての研修を深めながら授業改善を進める。 ・まなびのプラン、単元テストを活用し、評価を授業改善に活かす。 ・まなびのプランを改良し、身につける力を明確にする。 ・道徳の時間についてもすべての職員で授業力の向上を目指す。	・本格実施となる指導要領に基づいた年間指導計画、学習情報、まなびのプランの作成、及び道徳の時間との関連を示す別葉を作成する。 ・授業を進めつつ、単元テスト等の評価を積み上げ、授業改善に役立てる。 ・授業改善を進めつつ、より良い評価についても研究する。 ・道徳の時間についても指導と評価の一体化を図る。	
	↓	↓	↓	↓	
	実践した内容	年間指導計画 学びのプランを作成することができた 校務支援システムを利用して、学習評価をおこない、より精度の高い評価を出すことができるよう研修会を実施した。 発表活動を取り入れた授業を1単元に1回以上おこなう。 道徳は全員が授業を実施して評価方法について考える機会を作ることができた	・各教科で学習情報を元にまなびのプランを作成し活用した。 ・多くの教科で単元テストを実施し、その評価を基に授業改善を行った。 ・感染症対策を講じながら、学び合いの機会を設定し、主体的に学習に取り組む環境を整えた。 ・生徒の発表の機会も工夫して行った。 ・道徳の時間はすべての職員で取り組み、その授業資料を共有した。	・各教科で新指導要領に基づいた学習情報とまなびのプランを作成し活用した。 ・多くの教科で単元テストを実施し、その評価を基に授業改善を行った。 ・ICT機器を使用した授業づくりに取り組んだ。 ・前年度からの感染症対策を続けながらも、学び合いの機会や、主体的に学習に取り組む環境を整えた。 ・生徒の発表の機会も工夫して設定した。 ・道徳の時間はすべての職員で取り組んだ。 ・道徳と各教科の関連の別葉を作成した。	
↓	↓	↓	↓		
達成度評価	A	A	A		
評価の根拠	年間指導計画を作成し、授業開きの際に利用することができた。 校務支援システムで評価をだすことができるようになった。 発表活動を1単元に1回以上行うことができた教員が80%をこえた。 学年会で道徳の評価について話し合いを持ち、同一視点での評価ができるようになった。	・学習情報、まなびのプラン等で身につけたい力を生徒自身が把握して学習に向かうことができた。 ・各教科で学び合いの工夫をする中で、感染症対策の影響が「書く力」を伸ばす結果となった。 ・研究で取り組んでいる「教科横断的な学習」の実践を全教員が1実践以上取り組んだ。生徒自身も学んだことを他教科に生かす視点を獲得している。 ・道徳の授業を全員が行うことで、教師が一つひとつの題材を深めることができ、授業改善が進んだ。	・まなびのプランによって、生徒は見通しを持って学習に取り組むことができた。 ・ICT機器の活用については、教科ごとに効果的な使用方法が検討できた。 ・発表の機会の設定では、ICT機器の活用も含め、思考・判断・表現の力を伸ばさせるため授業の工夫が見られた。 ・道徳教育では、別葉を作成したことで、各教科でもこれまで以上に道徳を意識した授業構成を考えることができた。 ・道徳の授業では、全職員で取り組むことができた。また、学年によっては内容項目ごとの変容を生徒自身が迎えるものを残すことができた。評価もより具体的な表記とすることとした。		
↓	↓	↓	↓		
学校の実態を踏まえた課題	新しい学習指導要領を見据えた年間指導計画や学びのプランを作成する。校務支援システムをさらに利用していく 道徳については全員で授業を行う体制を続けていく	・新しい学習指導要領に基づいた年間計画、学習情報、まなびのプランの作成をすともとに道徳の項目との関連を確認する必要がある。 ・授業改善に役立てる評価について、更に研修する。 ・道徳についても、授業改善とそれに役立てる評価、生徒を伸ばす評価について研修と検討を行う。	・生徒の関心を引きつける魅力ある授業づくりという視点の強化が必要である。 ・主体的な学習がより深い学びにつながるよう改善は続けていく。 ・道徳の授業では、授業者が固定されていないので、授業による一人ひとりの気持ちの変容を迎える資料の作成が必要かと思われる。		

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【 逗子市立逗子中学校 】

柱Ⅱ	支援の充実	4年間を見据えた取組内容	安心できる居場所づくりと絆づくりの推進
-----------	--------------	---------------------	----------------------------

2019年(平成31年)度	2020年(令和2年)度	2021年(令和3年)度	2022年(令和4年)度
---------------	--------------	--------------	--------------

期首入力	学校の実態と課題	生徒が安心できる居場所や生徒間の絆づくりがすすまず、不登校が増加する要因の一つとなっている。また、授業がわからず、取り出している授業を希望する生徒も増加傾向である。	生徒一人一人の様子をみるのにもっと時間をかけてやりたい。共有のための話し合いの時間や報告を書く時間を確保したい。	様々な課題を抱える生徒がいるので、安心できる居場所としての学級、学年集団づくりと並行して、個別の対応をできる支援室の運営は今後も必要である。 ・Q-Uテストを用いない場合は何が出来るのかを検討する。学級、学年づくりに全教職員で取り組む意識を高める。	学年全体で生徒を育成する視点で次年度も行き、集団の育成について、誰もが担当できるよう職員の育成を合わせて行う。 ・支援室の使用については様々な生徒の特性や要望、必要に応じて検討していく必要がある。
	↓	↓	↓	↓	
	年度目標	安心できる居場所づくりをすすめ、生徒が学習に取り組めるようにする。	安心できる居場所としての学級経営、生徒同士が互いに認め・助け合う集団づくりを進める。	一人ひとりが大切にされ、安心できる居場所のある集団づくりを学年として進める。生徒同士が互いに認め、助け合う関係性をあらゆる機会を通じて形成する。	
取組計画	↓	↓	↓	↓	
	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある生活を送るために、規則正しい生活習慣を確立させる。 ・発達段階に応じた思いやりの心の育成を図る。 ・学習支援シートを作成し、教科間で連携した支援を重視する。 ・教科相談等の診断的支援体制を構築する。 ・生徒同士が互いに認め・助け合う集団づくりをおこなう。 ・すべての生徒が感謝し合う 人間関係の構築を図る。 ・いじめへの未然防止と早期発見・早期対応・早期解消に努める。 ・生徒の多面的な理解を進め、生徒の困り感の早期発見に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の支援的な視点を強化するために自己チェックリストを活用する。 ・生徒の主体的な活動を大事にした学級経営を進める。 ・生徒が互いに認め、助け合う活動を通じて、安心して過ごせる集団をつくる。 ・Q-Uテストを活用し、生徒理解を深め、個々の状況を把握し、早期対応に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の支援的な視点を強化するために自己チェックリストを活用する。 ・生徒の主体的な活動を大事にした学級・学年経営を進める。 ・生徒が互いに認め、助け合う活動を通じて、安心して過ごせる集団をつくる。 ・生徒の特性に合わせた対応を共通理解し、集団の指導に活かす。 		

期末入力	実践した内容	<ul style="list-style-type: none"> ・発達段階に応じた思いやりの心の育成を図るために 評価できる行動を褒めることを行った。 ・学習支援シートを作成し、教科間で連携した支援を教育相談で実施した。 ・教科相談等の診断的支援体制を夏休みに実施した。 ・生徒同士が互いに認め・助け合う集団づくりをおこなう。 ・いじめへの未然防止のため生徒とふれあう時間を増やした。 ・生徒の多面的な理解を進め、生徒の困り感の早期発見に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導や人権に関わる自己チェックリストを用い、教職員自身に支援的な姿勢を定期的に確認させた。 ・学級担任、学年職員が、生徒が互いに認め、助け合う活動を計画的に取り入れ、集団づくりを行った。 ・Q-Uテストの結果を基に、学年会で対策を練り、必要と思われる生徒を重点的に支援をするようにした。 ・生徒支援のための情報シートを活用しながら改善を重ねた。 ・支援室登校の生徒への対応がスムーズに行われるようシステムを検討した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己チェックリストにより支援的視点の確認を行った。 ・学級経営を学年全体で捉え、学年会で集団の育成について検討した。 ・支援委員会を定期的に開催し、個々の生徒への支援のあり方を協議した。 ・職員会議、朝の打ち合わせで生徒情報を確認する時間を取った。 	
	↓	↓	↓	↓	

	達成度評価	B	A	A	
--	--------------	----------	----------	----------	--

期末入力	評価の根拠	<p>気になる生徒の情報共有し、教科指導に役立てた。 教科相談など回数は少ないが、実施することができ生徒の反応もよかった。 学習支援シートは担任にとっても面談の資料としては有効であった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・Q-Uテストの結果を学年が活用でき、結果的に多くの生徒にとって安心できる集団づくり、居場所づくりができた。 ・生徒支援の情報シートが適宜改善され、その結果、支援委員会の充実が図られた。 ・支援室登校の生徒はメンバーの入れ替わりがあったが、人数が減るには至っていない。しかし、学習指導員も配置され、対応する教職員の連携がスムーズになり、生徒が教室復帰へのエネルギーを蓄える安心できる居場所となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出欠確認のボードにより、生徒の動きの確認が取りやすくなった。 ・支援室を使用する生徒への対応が、職員室、保健室、支援室で連携が取れた。システム化されてきた。 ・全教職員で全生徒を支援し、育成していくことが意識化され、学年を越えて対応することができている。 ・突発的な事項にも生徒の気持ちに寄り添った対応をすることができた。 	
	↓	↓	↓	↓	

学校の実態を踏まえた課題		生徒一人一人の様子をみるのにもっと時間をかけてやりたい。共有のための話し合いの時間や報告を書く時間を確保したい。	様々な課題を抱える生徒がいるので、安心できる居場所としての学級、学年集団づくりと並行して、個別の対応をできる支援室の運営は今後も必要である。 ・Q-Uテストを用いない場合は何が出来るのかを検討する。学級、学年づくりに全教職員で取り組む意識を高める。	学年全体で生徒を育成する視点で次年度も行い、集団の育成について、誰もが担当できるよう職員の育成を合わせて行う。 ・支援室の使用については様々な生徒の特性や要望、必要に応じて検討していく必要がある。	
	↓	↓	↓	↓	

2019年(平成31年)度～2022年(令和4年)度

学校教育総合プランに沿った重点とする取組と評価

【 逗子市立逗子中学校 】

柱Ⅲ	学校組織の充実	4年間を見据えた取組内容	研究・研修の充実	
-----------	----------------	---------------------	-----------------	--

2019年(平成31年)度	2020年(令和2年)度	2021年(令和3年)度	2022年(令和4年)度
----------------------	---------------------	---------------------	---------------------

期首 入力	学校の 実態と課 題	本校は、今年度逗子市の委託研究Ⅰに該当している。昨年度は休業中研修会への参加が少ない面が見られた。積極的に研修へ参加し、その内容を校内で広めていく必要がある。	Q-Uテストの結果からわかることを次年度のクラス分けに使う。グランドデザインは次年度も継続して作成していく。逗子市教育委員会委託研究の本発表のための研修を実施する。	・新しい評価については、更に研修を重ね、学校全体が共通の認識の下に実際の評価を進めていく必要がある。 ・2年間の研究を終え、新たな課題を研究主題として設定していく。評価、道徳、ICT機器の活用等が今後の課題となる。	・ICT機器が生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を育てつつあると感じているが、学習の深まりを作っていくには更に実践と研究が必要であろう。活用しやすい環境を整えることも合わせて考えていきたい。 ・前研究からの「教科横断的な学習」の視点を持った取り組みは、全体としては深まるには至らなかった。 ・新しい評価方法については、実践しながらの気付きを全体で共有し、精度の高いものにしていく必要がある。必要に応じて研修会を持つ。
	↓	↓	↓	↓	
	年度目 標	積極的な研修や研究への参加を実施し、内容の共有化をはかる。	積極的な研修や研究への参加を促す。校内の研究会や会議でその内容の共有化を図り、校内研究や学校運営に生かす。	これまでの取り組みの成果を新しい組織で共有し、その上に、新しい評価やICT機器の活用についての研究を積み上げ、学校全体で取り組む。	
取組計 画	↓	↓	↓	↓	
	取組計 画	・逗子市の委託研究の主題について研究を深める。 ・教育活動の見直しにより、展望をもちながら組織的・計画的・継続的に校内研修を計画する。 ・研修・研究会・担当者会等へ積極的に参加するよう、教職員の意識を啓発する。 ・研究授業の保護者・地域への公開を積極的に実施する。 ・校外での研修会を通して、内容の共有化を図る。 ・休業中の研修会への積極的な参加をおこなう。	・逗子市教育委員会委託研究の研究主題について、学校全体で研究を深める。 ・QUについての研修や学級運営、生徒指導に係る研修を実施し、支援的視点を持って、校内研究を進める。 ・次年度から始まる新しい評価方法についての研修・研究を行う。	・学習指導部を中心に、これまでの研究内容を深める。 ・新しい評価方法について、学校として研究しつつ構築する。 ・新学習指導要領の学習を進める上でのICT機器の効果的な活用方法を校内研究として取り組む。	
	↓	↓	↓	↓	

期末 入力	実践した 内容	・逗子市教育委員会委託研究中間発表会の実施 ・校内研修の充実 ・研修 研究会への積極的な参加	・逗子市教育委員会委託研究発表会の実施 ・新しい評価についての研修の実施	・新しい評価方法を実践しつつ研究 ・前年度末に配備されたChromebookを用いた授業づくりについて、研究推進委員会を中心に、研修会、授業研究会を実施 ・逗子市教育委員会委託研究の中間発表会を実施	
	↓	↓	↓	↓	
	達成度 評価	A	S	A	
期末 入力	↓	↓	↓	↓	
	評価の 根拠	・QUテストを実施して、その結果より生徒の様子を知ることができ、その読み方まで学ぶことができた。 ・学校 学年 教科のグランドデザインを作成して、評価してもらうことができた。 ・授業のあり方について学ぶことができた。	・逗子市教育委員会委託研究の研究主題について、感染症予防対策のために総合的な学習の計画の変更を余儀なくされた一年であったが、学年で計画を練り直し、それに基づき全教員が1実践以上に取り組んだ。教科横断的な学習を実践することで、授業者としていかに主体的に学ばせていくかを深く考えることになった。 ・Q-Uテストについての研修会を持ち、結果の見方を深めた。また、Q-Uテストの結果を基に、学年会で学年経営、学級経営について検討した。生徒にとって学級・学年を安心できる居場所とすることができた。 ・講師を招き、新しい評価についての考え方を理解した。	・全教員でICT機器の授業への活用を実践し研究しながら研修を積み重ねることができた。日常的に使用する道具としてのChromebookになりつつある。 ・総合的な学習の時間と各教科の横断には前年度までの研究の成果を活かすことができた。継続性が見られた。 ・感染症予防対策を立てつつ、中間発表会を実施することができた。	
	↓	↓	↓	↓	

期末 入力	学校の 実態を踏 まえた課 題	Q-Uテストの結果からわかることを次年度のクラス分けに使う。グランドデザインは次年度も継続して作成していく。逗子市教育委員会委託研究の本発表のための研修を実施する。	・新しい評価については、更に研修を重ね、学校全体が共通の認識の下に実際の評価を進めていく必要がある。 ・2年間の研究を終え、新たな課題を研究主題として設定していく。評価、道徳、ICT機器の活用等が今後の課題となる。	・ICT機器が生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を育てつつあると感じているが、学習の深まりを作っていくには更に実践と研究が必要であろう。活用しやすい環境を整えることも合わせて考えていきたい。 ・前研究からの「教科横断的な学習」の視点を持った取り組みは、全体としては深まるには至らなかった。 ・新しい評価方法については、実践しながらの気付きを全体で共有し、精度の高いものにしていく必要がある。必要に応じて研修会を持つ。	
	↓	↓	↓	↓	
	学校の 実態を踏 まえた課 題	Q-Uテストの結果からわかることを次年度のクラス分けに使う。グランドデザインは次年度も継続して作成していく。逗子市教育委員会委託研究の本発表のための研修を実施する。	・新しい評価については、更に研修を重ね、学校全体が共通の認識の下に実際の評価を進めていく必要がある。 ・2年間の研究を終え、新たな課題を研究主題として設定していく。評価、道徳、ICT機器の活用等が今後の課題となる。	・ICT機器が生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を育てつつあると感じているが、学習の深まりを作っていくには更に実践と研究が必要であろう。活用しやすい環境を整えることも合わせて考えていきたい。 ・前研究からの「教科横断的な学習」の視点を持った取り組みは、全体としては深まるには至らなかった。 ・新しい評価方法については、実践しながらの気付きを全体で共有し、精度の高いものにしていく必要がある。必要に応じて研修会を持つ。	